



知っ得 金融商品ガイド

上げ相場、下げ相場で ファンドの総合力分析

株

式市場は総じて薄薄いの中、方向感が定まらず日中の値動きも大きい。こんな時には落ち着いて相場を分析するチャンスだ。

TOPIXをみると4月7日に当面の高値1783.33をつけた。その2カ月後の6月13日には1458.27まで下げたが、7月末には1572.27まで戻している。ではこの間国内株式を組み入れたファンド(投資信託)は「上げ相場」と「下げ相場」の過程でどのようなパフォーマンスを示したのか。つまり、個別ファンドについて相場上昇期と下落期のパフォーマンスを調べてみようというわけだ。もちろん「上げ相場の時にはしっかりと上げ」、「下げ相場ではあまり下がっていない」ファンドを探すのが目的だ。

TOPIXに勝った 唯一のファンド

調査対象ファンドは「追加型・国内株式一般型」(投資信託協会の分類)のうち、

「資産額500億円以上」かつ「1年以上の運用成績を残しているもの」に限った。まずは「2006年1月までの6カ月間(上昇期)」と「06年7月までの6カ月間(下落期)」のパフォーマンスの関係をみた。図1がそれを示している。縦軸は06年1月までの6カ月間、横軸はその後の7月までの6カ月間の騰落率を示す。グラフの性格上、右上に分布するほど高い評価を与えることができる。

aは「住信SRI・ジャパン・オープン」。7月までの6カ月間(下落期)はTOPIXとほぼ同程度下げているが、今年1月(上昇期)までの上昇率は群を抜く。さらに注目したいのがbの「アクティブバリュウオープン」。いわゆる割安株に集中投資するタイプのファンドの中でもパフォーマンスが高いことで知られている。上昇期にはTOPIX(プラス42%)を大幅に上回る49%の上昇を示す一方、下落時にはTOPIX

(▲8.1%)を相当上回る成績(▲3.3%)を残した。

次に「06年4月までの9カ月間(上昇期)」と「06年7月までの3カ月間(下落期)」についても同じようにチェックしてみた。図2に示したとおり上記の分析と似通った結果になった。

やはり目立つのがbの「ア

クティブバリュウオープン」。図からわかるとおり、これらのファンドのなかで唯一、上昇、下落期ともにTOPIXを上回っている。「上げる時には上げ」、「下げ相場でも下値抵抗が強かった」のだ。ただ違った側面から見ると「これだけファンドをそろえても、TOPIXに勝つファンドはわずか1本しか言えなくもない。

かななかったのか」と

一方、以上の分析で見るとざりまったく顔色無しなのがxの「日興エポリューション」を筆頭に、yの「デジタル情報通信革命」、zの「三井住友・日本株オープン」。特にxは昨年までは日本株ファンドの中ではトップクラスの成績を示していたのだが、このファンドが組み入れの中心においていた新興、中小型株が今年に入ってから急落した影響をまともに受けた。

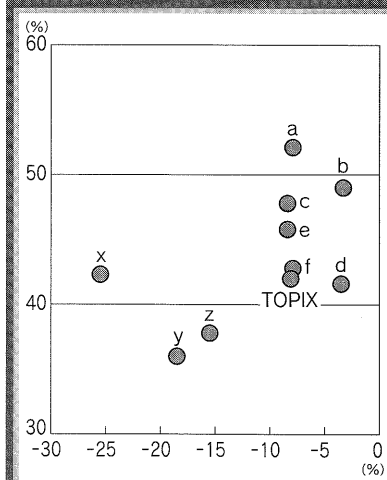
表1: 株価上昇・下落期のパフォーマンスを比較

会社名	ファンド名	図1		図2	
		上昇期の騰落率 (06年1月まで 6カ月間)	下落期の騰落率 (06年7月まで 6カ月間)	上昇期の騰落率 (06年4月まで 9カ月間)	下落期の騰落率 (06年7月まで 3カ月間)
a	住信アセットマネジメント	52.1	▲7.9	53.1	▲8.8
b	T&Dアセットマネジメント	49.0	▲3.3	51.6	▲5.9
c	大和証券投資信託委託	47.8	▲8.4	48.8	▲9.3
d	トヨタアセットマネジメント	41.6	▲3.5	48.5	▲10.4
e	野村アセットマネジメント	45.8	▲8.4	46.3	▲8.9
f	大和証券投資信託委託	42.8	▲7.9	44.5	▲9.6
x	日興アセットマネジメント	42.3	▲25.5	38.1	▲21.3
y	大和証券投資信託委託	36.0	▲18.5	30.7	▲13.1
z	三井住友アセットマネジメント	37.8	▲15.5	33.7	▲11.5
	TOPIX	42.0	▲8.1	42.4	▲8.4

図1

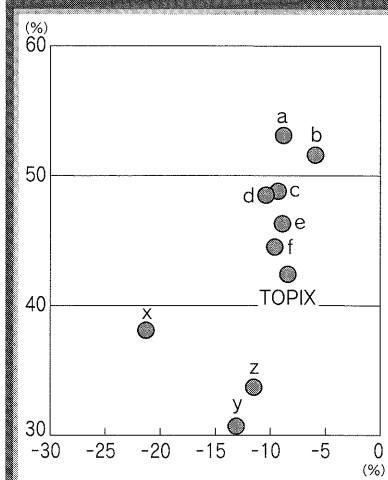
図2

図1: 株価上昇・下落期のパフォーマンス分析(1)



注) 縦軸は2006年1月までの6カ月間、横軸は7月までの6カ月間の騰落率

図2: 株価上昇・下落期のパフォーマンス分析(2)



注) 縦軸は2006年4月までの9カ月間、横軸は7月までの3カ月間の騰落率